

第3回おおさかプラスチック対策推進ネットワーク会議

議事概要

日時：令和2年6月26日（金）15:00～17:00

場所：ウェブ会議

出席者：出席者名簿のとおり

概要

1. 開会

2. 議題

(1) プラスチック対策の最新の取組について

日本バイオプラスチック協会、PET ボトルリサイクル推進協議会及びパタゴニア大阪より、プラスチック対策に関する最新の取組について事例紹介。

【日本バイオプラスチック協会】

バイオプラスチックの定義やその種類と役割、また日本国内の動きや市場展開について紹介。

《質疑応答》

<バイオプラスチックについて>

(ごみゼロネット)

- ・今回レジ袋の有料化の対象外の中にバイオマス素材の配合率が25%以上のものが含まれているが、25%というのはいささか低く感じる。高配合率のものを作ることはできないのか。

(日本バイオプラスチック協会)

- ・技術的には可能。経済産業省も今後、この配合率は上げていく予定と聞いている。ただし、市場においてはコストの問題が大きい。

(ごみゼロネット)

- ・需要が高まれば、コストは下がるか。

(日本バイオプラスチック協会)

- ・例えば、バイオポリエチレンの生産企業は世界で1社であり、需要だけの問題ではないと思う。この業界にいろいろな企業が参入し、技術の向上と価格競争が図られればコストが下がっていくと思う。

<プラスチックの分類について>

(花田教授)

- ・表示マークは分解機能に注目するほうが良いと思う。ポリ乳酸はEUでは生分解性プラスチックに分類されているが、日本ではバイオマスプラスチックに分類されているのはなぜか。

(日本バイオプラスチック協会)

- ・EUではコンポスト処理が進んでおり生分解性が求められている。日本ではポリ乳酸の強度を利用した使用方法となっておりバイオマスプラスチックに分類している。

<バイオマスプラスチックのリサイクルについて>

(日本フランチャイズチェーン協会)

- ・バイオマスプラスチックを配合したプラスチック樹脂はリサイクル可能か。

(日本バイオプラスチック協会)

- ・まず、生分解性プラスチックはリサイクルできない。バイオマスプラスチックについては、既存の石油化学系樹脂と同じものが作ればリサイクル可能。現在のところ、PET、PE 以外にはバイオマスで作る技術がなく、既存の石油化学系樹脂とのリサイクルはできない。

<農業分野での活用について>

(原田准教授)

- ・農業ごみは管理が困難なため、管理不十分な土地が問題になっている。その分野に生分解性プラスチックは非常に有効だと考えている。

鹿児島県の調査では、農業分野において、生分解性プラスチックの導入によるコストは多少かかったとしても、片付けにかかるコストが下がるため、合算すると全体でのコストを削減することができるという報告がある。

ただし、有機 JAS の認証を取ろうとすると、使用できないと聞いている。

有機 JAS と生分解性プラスチックの使用を両立させるための将来的な展望はあるか。

(日本バイオプラスチック協会)

- ・将来のことはわからない。有機農業について生分解性プラスチックが使用できない理由は、有機 JAS 規格において有機農業には化学物質が使えないと定められているからと思われる。

【PET ボトルリサイクル推進協議会】

ペットボトルのリサイクルの動向及びボトル to ボトルリサイクルの方法と今後の見込みについて紹介。

《質疑応答》

<ペットボトルの不法投棄に関する統計について>

(原田准教授)

- ・ペットボトルの不法投棄は数字上ではほぼ0だが、適切に処分されていないゴミが0だとは思えない量で見つかっている。統計上では隠れているゴミについては、販売量と廃棄量を相殺するとほぼゼロであっても、各家庭に保存されている古いペットボトルのストックなどがごみとして排出されていることが原因だと考えているが、そういったストック分を集計する方法はないか。

(PET ボトルリサイクル推進協議会)

- ・ペットボトルの不法投棄について、分母となる年間のペットボトル販売量は約 250 億本と大きな数であるため、不法投棄される量は誤差の範囲となり、統計上の割合はほぼ0であるが、分子はそれなりの量になる。また、ペットボトルは品質を保存するために丈夫に作られており、20 年から 30 年経過してもマイクロプラスチックにならず分解されないため、年間で投棄される量は多くなくても、回収できない場所に溜まり、ごみとして目立つとい

う原因もある。台風などの後に見つかったペットボトルが20年前のものということは多々ある。

近年、水害の影響で、自然界にあるストック分については河口近くの河川敷などに打ち上げられ回収されることがあるので、全体として減少してきているのではないかと考えているが、ストックを含めたフロー図については今後分析を進めていきたい。結果についてはまた報告する。

【パタゴニア大阪】

デPOSIT制のショッピングバッグの取組をはじめとして、その他パタゴニア日本支社での環境問題に対する取組について紹介。

《質疑応答》

＜ショッピングバッグの回収率について＞

(原田准教授)

- ・デPOSIT制のショッピングバッグの回収率が一定の数値から上がらないのはなぜだと考えているか。

(パタゴニア大阪)

- ・来店頻度が高いお客様は弊社がマイバッグのご持参を推進していることをご存知のため、デPOSITバッグを利用する方は少ない。店舗に来る機会が少ないなどの理由で、持つてくることを忘れているお客様は一定程度いると考えられる。

＜ショッピングバッグの有料化に関する苦情について＞

(原田准教授)

- ・ショッピングバッグが有料であることから苦情が発生することはあるか。

(パタゴニア大阪)

- ・若年層のお客様からのクレームは基本的にない。ショッピングバッグが有料の場合があることも一定浸透していると考えている。レジ袋を当たり前のサービスとして提供を受けている世代からは不満の声をいただくこともごく稀にある。年に1～2回程度。スタッフの説明不足に対してのご不満の声をいただくケースがほとんどである。

(2) 大阪府のプラスチックごみ対策について

事務局より、中間とりまとめを踏まえた今年度取り組む予定のプラスチックごみ対策及び新型コロナウイルスの影響により廃止・中止になった取組について説明。

(3) 意見交換

＜啓発について＞

(花田教授)

- ・新型コロナウイルスの影響によりイベント関連はほとんどが中止になってしまっていると思うが、今までのイベントに代わる啓発は何か考えているか。

(事務局)

- ・YouTubeをはじめとした映像などの啓発資材が有効かと考えている。

(花田教授)

- ・ポスター募集のコンテスト等が実施されていることがあるが、ポスターについては掲示している場所の近くを通る人にしか啓発できないため、効果は限定的だと考えていた。短い動画等を配信することで、啓発対象者が増え効果が高まると考える。

<量り売り商品における使い捨てプラスチック容器の使用量削減について>

(花田教授)

- ・プラスチックごみの削減に対して発生抑制が重要だと考えているが、現在コンビニエンスストア等で好評な〇〇カフェのような量り売り商品について、容器を使い捨てのプラスチックからマイボトルや消費者が持参した繰り返し使える容器に代えることで使い捨てプラスチック容器の使用量を減らすことができるのではないかと考えている。

(日本フランチャイズチェーン協会)

- ・衛生上の理由もあり、現在のところ、実現するためには課題が多すぎる状況。保健所の見解も確認したい。また、カップだけの問題でもなく、注ぐための機械の改良や衛生管理・会計処理などで発生する課題をどう解決するかを考えていかなければならない。社内的な議論はされているが、新型コロナウイルスの影響もあり、試験的な取組でさえも実施するのが困難な状況である。

(全国清涼飲料協会)

- ・衛生面の課題に付随し、清掃作業が増えることも課題の一つ。
やはり、付加価値をもっと作り出し、消費者からのニーズが増えないと難しいと思われる。国の方向性として、プラスチックごみの削減を進めるのであれば、保健所等他の機関との足並みをそろえていただきたいという思いもある。

(原田准教授)

- ・コンビニエンスストアでは、生活ごみの持込みに困っていると聞いた。街中にゴミ箱が少ないため、ゴミ箱を設置する必要があるのではないかと考えている。全てを行政に頼るわけではないが、そういう点では行政の力が必要だと考えている。

<ボトル to ボトルリサイクルの取組について>

(原田准教授)

- ・セブンイレブンでは、ペットボトルのボトル to ボトルリサイクルを進められており、関東の店舗ではペットボトルを持参するとポイントがもらえる。しかし、関西にはボトル to ボトルのリサイクル工場がないためそれができないと聞いた。関西には何が不足しているかと考えているか。(原田准教授)

(日本フランチャイズチェーン協会)

- ・ご指摘の通り、関西にはペットボトルに再生するためのリサイクル工場がなく、収集・運搬が課題。使用済みのペットボトルを新しいペットボトルにリサイクルするためには特別な処理が必要だが、その処理が可能な施設への収集・運搬の許可も新たなコストも必要となる。
ペットボトルを持参するとポイントに交換可能なコンビニエンスストアでは、その取組専用で使用済みペットボトルを収集・運搬する業者と契約し、リサイクル工場に運搬してい

る。ペットボトル原料にリサイクルした後、コカ・コーラ社にプライベートブランド飲料として再製品化のご協力を頂いている。

(PET ボトルリサイクル推進協議会)

- ・高品質なリサイクルを進めていくためにはガラスびんとの混合回収を変えていってほしいと思っている。

(花田教授)

- ・ペットボトルの回収について市町村の状況はどうか。

(大阪市)

- ・混合回収を実施しているが、地域によっては新たなペットボトル回収システムにペットボトルだけを取り出して回収する取組を始めている。ペットボトルだけの回収の場合、品質が良く、高値でリサイクル業者に販売できる。この利益を地域に還元していくという取組をしている。

(堺市)

- ・ペットボトルは分けて回収している。

(羽曳野市)

- ・ペットボトルの回収拠点に市の職員が出向いて、回収をしている。市内のごみ箱については、ごみの構成の多くが犬の散歩の際の糞が多く、ペットボトルを回収しても汚れているため、焼却せざるを得ない。今はごみ箱を公園に置かない方がよいという方向性になっている。

(熊取町)

- ・ペットボトルは分別での回収を実施している。分別の回収はできているが、道端に捨てられているペットボトルはなくなっていない。ポイ捨てされないための取組が必要だと考えている。

(吹田市)

- ・拠点回収を行っている。売却先であるリサイクル業者からの評価は高い。一方で燃焼ごみとして捨てられているペットボトルがあるため、どのようにして資源ごみとしてリサイクルに回るようにしていくかが課題。

<ごみ箱の設置について>

(原田准教授)

- ・ごみ箱があることが問題だという意見もあるが、ごみ箱を撤去しても、ポイ捨てや不法投棄は減少しない。ごみ箱がないことで近隣住民やボランティアさんが有志で、ポイ捨てされたごみの片付けをしている現状はおかしいと考えている。

海外では ICT を活用し、街なかのごみ箱が満杯になればわかるようになっており、効率的に回収する仕組みもある。

一方で、ペットボトルは資源であるが、ごみ箱で回収すると廃棄物になる。法律において有価物か廃棄物かは重要な扱いだが、現状はグレーな扱いとなっている。

誰もが納得できる方法で法的に整理されるよう行政にはお願いしたい。

<無料給水機の設置について>

(全国清涼飲料連合会)

- ・無料給水機の設置についてコロナウイルス感染防止策は何か考えているか。

(事務局)

- ・感染については対策をきちんと取りつつ、マイボトルの普及を促進するために、さまざまな設置の方法を念頭に、カフェなどの飲食店とも協力しながら、無料に限らない給水スポットを設置していきたい。

<ペットボトル自動回収機の支援について>

(全国清涼飲料連合会)

- ・ペットボトル自動回収機は高額であるが、小売店での設置にあたり、行政の支援は何か考えているか。

(事務局)

- ・大阪市で始まった回収や、関東のセブン・イレブンでの店頭回収など、様々な回収方法がある中で、それぞれの課題を整理したうえで、行政として何を支援できるか検討していきたい。

<新型コロナウイルスの影響について>

(ごみゼロネット)

- ・新型コロナウイルスの影響でステイホームによるプラゴミが増えていると聞いている。しかし、SDGsにおいて廃棄物の大幅削減を約束している一方で、現在はコロナ対策ばかりが優先されているが、コロナ対策と環境問題を一緒に考えていくことが重要。また、行政だけではなく、市民も一緒に考えられる取組が必要。例えば、地域における廃棄物減量等推進員に対する研修などで、2030年までにプラスチックごみをどれだけ減らすというロードマップを作っていくことも重要だと考えており、我々NPOも一緒に考えていきたい。

(4) その他

事務局より、今後のスケジュールについて説明。

次回は、8月中旬から下旬ごろを予定している。最終回となるため、今後の大阪府のプラスチック対策として一定の方向性をまとめたものをお示ししたいと考えている。

※第4回は、令和2年9月11日に開催決定。

3. 閉会